

研究主題

社会のありようと向き合い、考え抜く子供の育成 —「考え抜く」社会科授業づくり—

1 研究主題・副題について

(1) 研究総論との関連

一昨年度より、本校は研究主題「ともに学び、学び抜く子供—非認知能力に注目した授業を通して—」を掲げて研究を始めた。主題に示す「目指す子供」の具体化に向け、「非認知能力」、特に「意欲」と「粘り強さ」に注目して、それらに働きかける授業づくりを各教科で研究している。本校社会科では、引き続き研究総論との関連を図りつつ、社会科の授業づくりにおいて、子供たちの「意欲」や「粘り強さ」に働きかける具体的な手立てを考えていくとともに、それらが両者の発現や向上にどのようにつながるのかについて追究していく。

(2) 社会科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

社会のありようと向き合い、考え抜く子供

本校社会科では、研究主題に、「社会科で考える『ともに学び、学び抜く子供』の姿」を位置付け、3か年の研究において目指す子供像として表現する。

「社会のありようと向き合う」とは、子供が、学習する社会的事象やそれに関係する社会のありようを知ること、それらについてどの程度知っているのかをつかむこと、また自分がそのような社会とどのように関わっているのかを把握することから始まると考える。「知る」ことで「知らない」ことへの「問い」が生まれ、考えていく素地がつくられる。同時に、そのような「問い」は、対象となる社会的事象に向き合う方向性（どのように考えていくか、どのような視点や立場から捉えていくか）を表すものになる。このような学習対象について自分の既有知識の有無や立場を確認し、進んで「問い」をもとうとする姿や、「問い」を解決していくための見通しを立てようとする姿を「向き合う」姿と定義し、社会科授業において「意欲」をもって、または高めて学習に臨む様子と捉える。

「意欲」と「粘り強さ」に働きかける社会科授業を研究するにあたり、一昨年度（研究第一年次）は、『問いの更新』を繰り返す社会科授業づくりを研究副題に据え、「理想とする学習問題をあえて定めない」という授業づくりを行った。結果として、導入段階のハードルを下げ、授業者側が子供に合わせて柔軟な学習計画を構築することができた。反面、「ゴール」を明確に定めなかった分、「どこまでを学べばよいのか」そのために「何を学ぶ必要があるのか」が不明瞭になり、学習の深まりや、「問い」をもった後の問題解決に対する主体性などに課題を残した。

それに対し、昨年度（研究第二年次）は、『考え抜く』質を高める社会科授業づくりを研究副題とし、「学習問題を授業者が定める」という別物の授業づくりにチャレンジした。一年次で不明瞭となった「どこまでを学べばよいのか」、「何を学ぶ必要があるのか」を授業者が理解した上で、それらを明確にしたより高次元の「問い」を一斉に設定できたことは、学習の深まりを促した。また、第6学年の歴史学習において、「向き合う」と題し、単元学習の中で事象や資料を鵜呑みにせず相対したり、理由や背景を考えたりする問いや学習問題を、年間を通して計画的に設定した。歴史を単なる「過去の事柄」として暗記的に学習するのではなく、「歴史を考える」学習に継続的に取り組むことによって、子供の「考える」力の醸成につなげることが

できた。さらに、単元終了時の振り返りで、学習問題や解決の見通し、追究の仕方などを自己評価させた。多くの子供が自分の学び方を具体的に見直したり、授業者が設定した学習問題を評価したり、自分なりの「問い」を提案したりすることができた。「どう問いをもつ・つくるか」を主眼に置いた二年間で、社会のありようと「向き合う」社会科授業づくりの要点や手立てについて研究を積み上げることができたと思う。

一方で、「考え抜く」については、『向き合う』ことによって生成された問いを、自ら立てた解決の見通しをもとに追究しながら、他者との関わりを通して考えを深めたり新たな問いを見出したりする姿、今後の社会の在り方を吟味・判断したりする姿を表現している。」と昨年度まで定義し、その実現を目指す授業づくりを行ってきた。しかしながら、二年間の研究を振り返り、「その定義は本当に『考え抜く』ことなのか」、「そもそも『考える』と『考え抜く』の違いは何なのか」と疑問を抱き、再度捉え直すこととした。

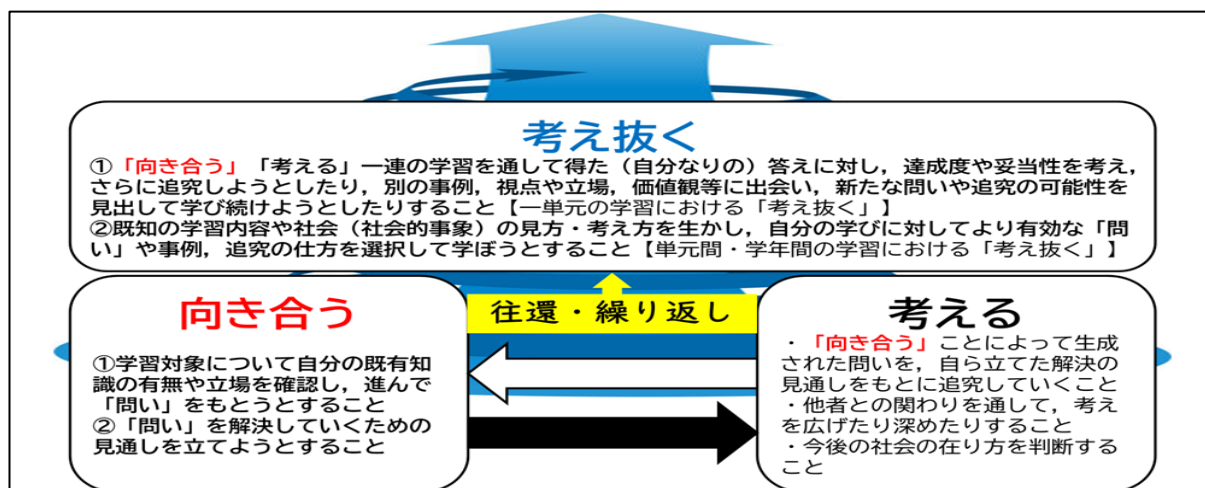
共同研究者から助言を仰ぎ、「考え抜く」とは、「向き合う」と「考える」ことを往還させたり繰り返したりする中で生まれる姿ではないかという捉えに行き着いた。「向き合う→考える」を1サイクルの問題解決の学習過程とすると、その中で得た「答え」に対して子供が「本当にそれでよいのか」、「まだ解決し足りていないことはないか」、「さらに考えたいことはないか。」などと立ち止まって、とことん考えよう、考え続けようと2サイクル目の学びをつくろうとすることが、「考える」と「考え抜く」の差ではないかと考えた。『考え抜く』質を高める社会科授業づくり」を研究副題とした昨年度研究の成果は、実は『考える』質を高める社会科授業づくり」のレベルに留まっていたのではと見直すに至った。

そこで、研究最終年次である今年度は、「考え抜く」の定義を修正し、研究主題のイメージを図1のように考えた。社会のありようと「向き合う」授業づくりに挑戦した一年次、様々な「向き合い方」を経験しながら、「考える」質を高める授業づくりを提案した二年次をつなげ、あらためて「考え抜く」社会科授業づくりとはどのようなものかを、子供の姿や変容とともに検証する三年次にしていきたいという思いをのせ、研究副題を『考え抜く』社会科授業づくり」として研究を進めていくこととする。

「考え抜く」とは

- ①「向き合う」、「考える」一連の学習を通して得た（自分なりの）答えに対し、達成度や妥当性を考え、さらに追究しようとしたり、別の事例、視点や立場、価値観等に出会い、新たな問いや追究の可能性を見出して学び続けようとしたりすること。
- ②既知の学習内容や社会（社会的事象）の見方・考え方を生かし、自分の学びに対してより有効な「問い」や事例、追究の仕方を選択して学ぼうとすること。

図1 令和6年度本校社会科研究主題のイメージ

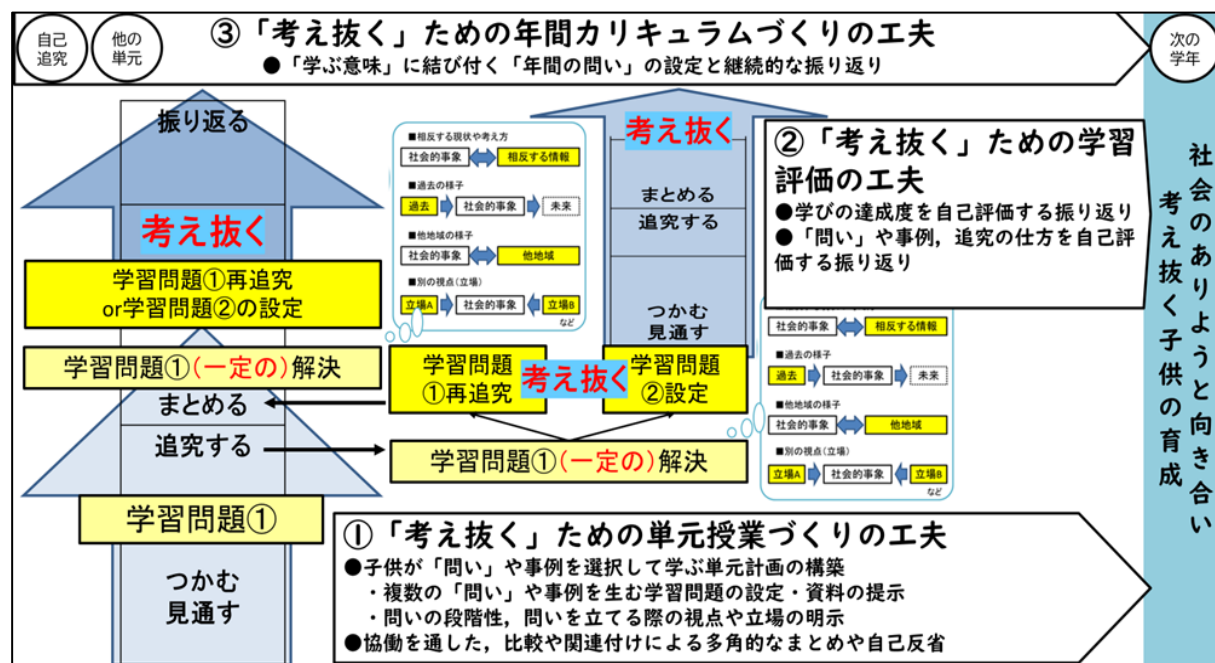


2 研究内容（三年次）

- ①「考え抜く」ための単元授業づくりの工夫
 - 子供が「問い」や事例を選択して学ぶ単元計画の構築
 - ・複数の「問い」や事例を生む学習問題の設定・資料の提示
 - ・問いの段階性、問いを立てる際の視点や立場の明示
 - 協働を通した、比較や関連付けによる多角的なまとめや自己反省
- ②「考え抜く」ための学習評価の工夫
 - 学びの達成度を自己評価する振り返り
 - 「問い」や事例、追究の仕方を自己評価する振り返り
- ③「考え抜く」ための年間カリキュラムづくりの工夫
 - 「学ぶ意味」に結び付く「年間の問い」の設定と継続的な振り返り

今年度は、研究副題『「考え抜く」社会科授業づくり』に合わせて、本校社会科が、子供たちの学びを「考える」から「考え抜く」に昇華するために必要と考える工夫を研究内容に据え、年間を通した実践を行っていく（図2）。

図2 令和6年度研究 「考え抜く」社会科授業づくりのイメージ



内容①について、「考え抜く」社会科授業の絶対条件は、「向き合う→考える」の問題解決的な学習が1サイクルで完結しないことである。そのためには、複数の問いや事例について考える必要感を感じて授業をつくることが求められる。その一つとして、学習問題の解決に向けて、子供が「問い」や事例を選択して追究していく「追究活動の複線化」を授業づくりに取り入れる。また、「追究活動の複線化」のもととなるのが、「資料」となろう。子供の多様な「考えよう」、「考えてみたい」が発現するような社会的な事象との出会いがなければ、複数の「問い」や事例は生まれない。また、導入時に発現する子供個人の予想や疑問は、学習問題に向かう「問い」となり、追究活動の道筋となる。それゆえに、「つかむ・見通す」学習過程を中心に、子供の予想や疑問を「問い」の形に変換したり、どのような視点や立場からの予想や疑問なのかを分類・整理したりする活動を仕組む。そして、年間の社会科授業で登場した「問い」、視点や方法、立場などを蓄積し、

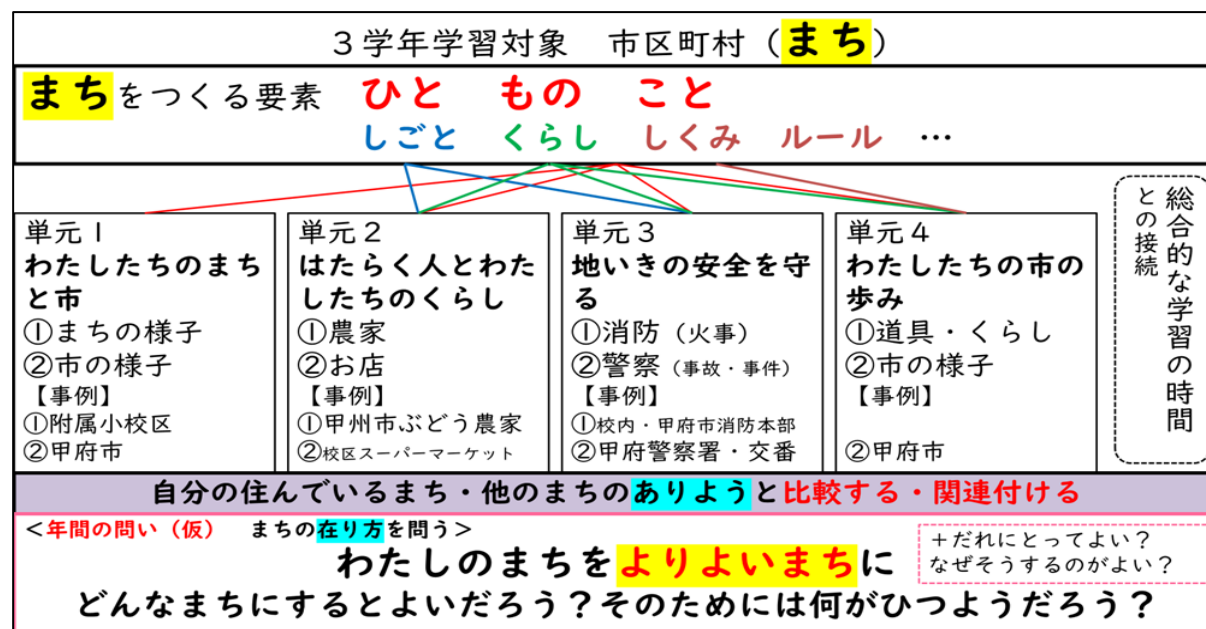
子供たちの社会的事象に対する「向き合い方」の引き出しを増やしていくことで、複数の追究の可能性を主体的に見出すことにつなげていきたい。

内容①に関連して、一単元の学習内に、小集団または全体での意見共有の時間を設定する。それぞれが追究した情報を比較したり関連付けたりする中で、学習問題に対して**多角的なまとめ**を行うようにする。子供が自分の学びの様子を友達と比べながら、問いや学習問題に対して「今、どれくらい解決しているのか。」「本当に解決したと言ってよいのか。」「まだ解決していないとすれば、何がわかっていないのか。」と振り返り、次の「考えよう」「考えてみたい」を探しながら追究を続けていくことを目指す。

内容②について、一時間ごとの振り返りと小単元ごとの振り返り、さらに大単元ごとの振り返りと、子供が自分の学びに対して立ち止まって考える機会をできる限り充実させる。それが、「考え抜く」段階をつくる土台となると考えるからである。一時間ごとでは、内容①で述べた通り、問いや学習問題に対して「今、どれくらい解決しているのか。」「本当に解決したと言ってよいのか。」「まだ解決していないとすれば、何がわかっていないのか。」と**学びの達成度を自己評価する振り返り**を行う。小単元ごとには、昨年度から継続して、学習内容や学習方法の振り返り（「この単元をもう一度学ぶとしたら・・・。」など）を行い、「問い」や事例、追究の仕方などを自己評価させる。子供たちが自分の学び方を見直し、後に生かすことを積み重ねていくことを目指す。大単元ごとの振り返りについては、内容③で説明する。

内容③については、第3学年の例を図3に示す。各単元の学習内容を「根拠」として考えられるような、**一年間の社会科学学習を通した問い**（今年度は「年間の問い」と名付けた）を授業開きで設定する。各単元の学習後に、「年間の問い」について振り返りを行い、「根拠」の加除修正をする。そうすることで、**年間の社会科授業を、そのまま『考え抜く』化**することを目指す。

図3 「考え抜く」ための年間カリキュラムづくりの工夫（例：第3学年・神戸実践）



〈参考文献〉

- ・樋口万太郎（2020）『子供の問いから始まる授業！』，学陽書房
- ・澤井陽介，中田正弘，加藤寿朗，宗實直樹（2023）『これからの社会科教育はどうあるべきか』，東洋館出版社
- ・北俊夫，馬野範雄，井上和夫（1997）『子供の個性を生かす複線型社会科授業の構想』，明治図書
- ・北俊夫（2018）『「主体的・対話的で深い学び」を実現する社会科授業づくり』，明治図書
- ・長瀬拓也（2021）『社会科でまちを育てる』，東洋館出版社